

3坪の住処と37坪の公共性 - 動作寸法を用いた小さな暮らし... -

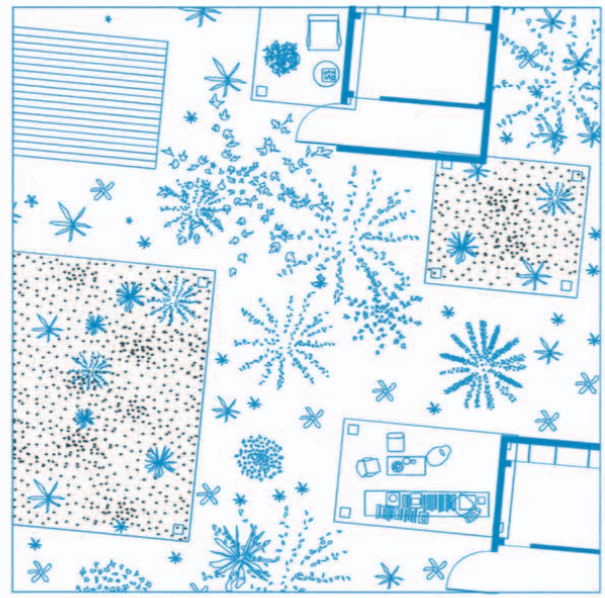
CONCEPT

都市居住者割合の中で、2010年に単身世帯が最も多くなり、一人で生活するという事が余儀なくされている人が少なくありません。そのような社会では40坪という一般的な家のサイズは、単身者にとって大きすぎる事、家を持つリアリティが見いだせない現実があります。

そこで、単身者の必要最低限の居住領域を、一日の生活と動作寸法によって3坪と定義し、残りの37坪を共有の場として、単身者の新たな生活について考えました。

ある人は、一日中3坪の部屋で自分の時間を過ごし、またある人は仕事をしているかもしれません。37坪の開かれた空間には、キッチンやリビングと読んでも良いような場所があり、おじいさんが畑で作った野菜をみんなで料理と食事を行い、くつろいでいるかもしれません。

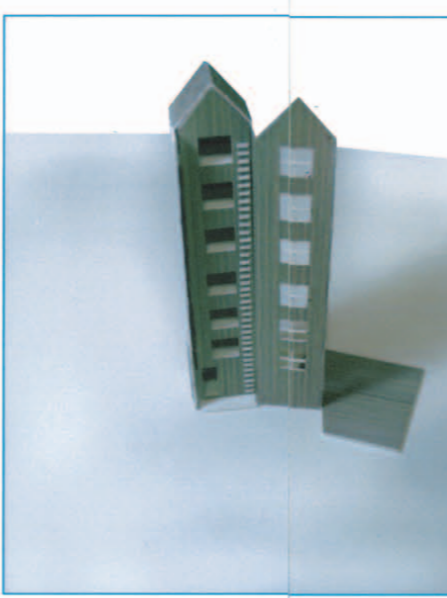
40坪すべてを一家族が占有してしまうのではなく、その割合を少なくする事によってより豊かになっていくと考え、新たな生活のあり方を提案します。



平面関係図



立面ダイアグラム



断面ダイアグラム

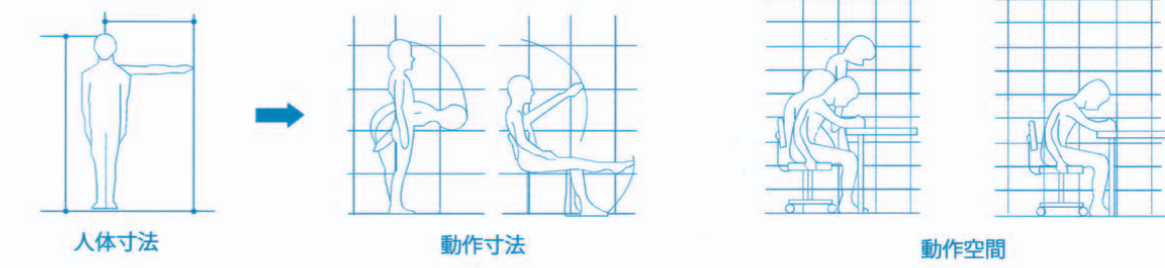
個人の住む領域を小さくする事によって、そこには多様な隙間、共有する場所が生まれる。

単身生活の一人の時間の確保ができるという豊かさ、一人では生きていく事が難しいという、単身生活ならではの問題を都市居住を考える上で考えていく必要がある。単身生活には、大きく分けて二つの問題があると言われている。

一つは身体的交流の減少、二つ目は情緒的交流の減少が、単身生活における不安を助長するものである。

37坪の共有空間が、街に連続し重なり合う事で、そこに植樹する人によって、森になる事や、そこで料理を振る舞う事によってレストランとなる事、そこで誰かが歌を歌えば一日だけの街のコンサート会場になるかもしれない。

そんな行為を誘発する余白のある街を提案する。

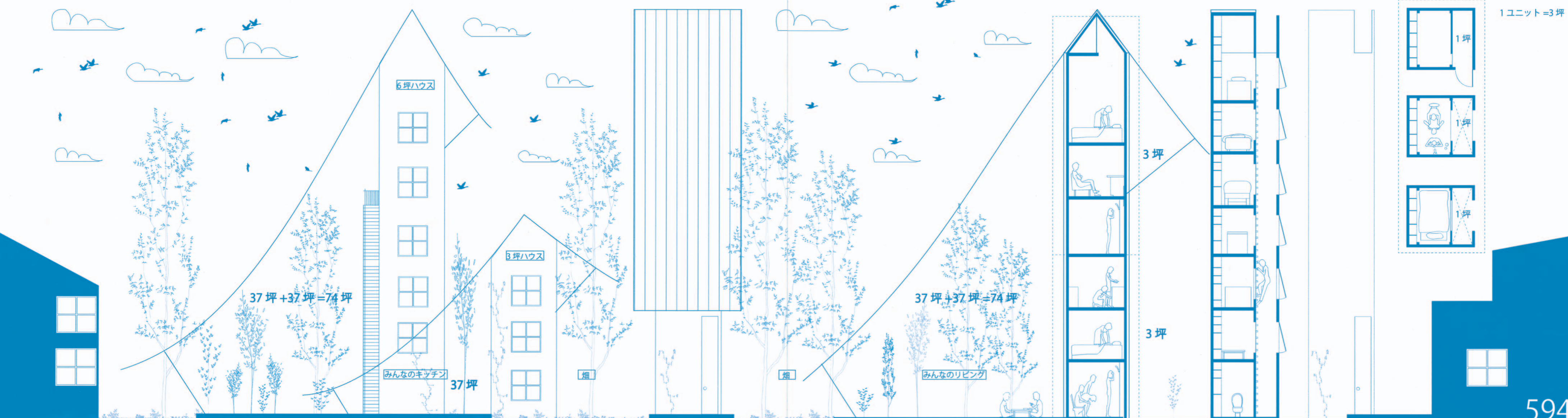


人体寸法      動作寸法      動作空間

建築は人体寸法を基本とした建築的思想が先人により提示されている。

ル・コルビジェによるカッパマルタンはモデュロールによって小さな空間の中の豊かさを提示した。

ここで提案する動作空間における寸法比とは、動作寸法+機能寸法+ゆとり寸法により構成する人間の行為と密接に関係する寸法比である。



1ユニット=3坪